
少年のおだやかな日々

春世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年のおだやかな日々

【Zコード】

Z9054E

【作者名】

春世

【あらすじ】

普通の不良・木下京介の学校にやってきた、転入生・村神葵はどこか変な男子生徒。でも一応、成績優秀・容姿端麗・性格品行な完璧人間。この、キャラが真逆な2人を巡って起こる数々の事件！この2人なら事件を解決できる…！？

一田三・コンペ誕生ー？

俺は気が付かなかつた。

今までの日々が、おだやかすぎたといつ事

・少年のおだやかな日々

俺は木下京介。キノシタ キョウスケ

16歳、高1。身長179cm、体重68kg 黒

髪で左眼に眼帯をしている。制服は前開け、ワイシャツもほとんど

のボタンを開けている。

いわゆる不良という奴だ。

学校にもあまり行っていない。

今日だつて学校に行くのは一週間ぶりくらいだ。とか言つて、俺が久しぶりに学校に行くと、俺達とは正反対の奴ら…一般に優等生と呼ばれる奴らがビビッソワソワしゃがむ。

あつひは怖がつてゐるのかもしれんが、俺としてはムカツクだけだ。

そういうや先週、ウチのクラスに転入生が来たつて聞いたな。なんかスゴイイケメンだから、ちょっとと思い知らせなきやなー、とかクラスメートの不良共が騒いでやがつたが……。

フン。馬鹿馬鹿しい。そんなことやつてゐるヒマあるなら、体でも鍛えろつてんだ。最近の不良共はみんな腑抜けちまつた。ただ何となく不良やつてますーみたいな顔しやがつて…。

まあ、いい。今日、俺が学校に行くのもその転入生が、顔は普通にイイんだが、なんか変な奴だつて噂になつていいから、ソレを確かめに行く為だしな。

ガラツ

教室のドアを開ける。

「あれ、ずいぶん早いですね。旦直ですか？」

女みたいに高い声音が教室の奥から聞こえた。

顔を上げると、そこには噂通りのイケメンの男がいた。だが、なんだ？この違和感は…？。自分でもよく分からない。目の前にいる奴は、別に普通だ。でも確実に何かが違う。噂はこの事なんだろうか…。

「木下さん？びつしました？ボーッとして…」

いきなりソイツが俺の顔を覗き込んできた。…まだ。さつきよりも強い違和感がある。近づけば近づくほど、違和感は強くなるらしい。

「いや。何でもない…。そういうえば、お前が噂の転入生か？先週来たつていう…」

「アレ、知つていて下さったとは光榮ですね。そんなに有名ですか、僕？ところで噂つて何の事ですか？」と、ソイツは首を傾げる。男なのに何故かそのポーズが似合っていた。微妙にウザい。

「知つてたと言つても、名前は知らないがな。といつかお前、本当に噂知らないのか？」

「はい。さつぱりですね、残念ですけど。君は知つてるんですか？」
ムカツク程似合つてゐる笑顔で、俺に問い合わせる。さつきまで気付かなかつたが、コイツ、スゴい女顔だな…。さつきの違和感はこつから来てんのかもな。

「ああ。俺も小耳に挟んだだけだがな。お前、顔はイイが変人つて噂されてるぞ。…というか、名前は？」

俺が気がついたように言ひつと、ソイツは一瞬キョトンとして、ああ！みたいな顔しやがつた。

「あ、すみません。君が親しい人のように話してくれるので、つい名前も知つてゐるものと思いこん、」「いいから早く言え」

するとソイツは口に手を添えて苦笑した。

「『』めんなさい。では、改めて。…初めまして。村神葵ムラカミアオイです、どうぞよろしく」と言って、また微笑を俺に向けた。

「じゃ、俺も改めて聞くが村神。…なんでお前、俺の名前を知っているだ?」「じゃあ僕も逆に質問しますけど、どうして僕が君の名前を知っている、と言い切れるんですか?」

なんだ、コイツ。自分が言つたこと忘れてるのか?

「お前、さつき俺がボーッとしてたとき話しかけただろうが」「はい、確かに」「そんとき、俺の名前言つてたじやないか。忘れたのか」

すると村神は面白そうに顔を歪めてクスクスと笑い出した。

「……何がおかしい」俺が低い声で呻くように言つと、村神は「すみません。しかし君も面白い人ですね。普通ならば気にしない、といつより自己納得すると思いますけど。あ、別に悪口を言つている訳じゃありませんよ?」「悪かったな、普通じゃなくて。で、なんで名前知ってるだ。まあ、どうせ名簿を見て、一番出席日数少なかつたのが俺だったから田に留まつた…とか、そんなことひるだら

「違いますよ。そもそも名簿なんて見ないですし」「じゃあ、なんでだ」

村神はマックの0円スマイルのような笑顔を見せて言つた。
「クラスの女子が教えてくれたんですよ。キミのことを憧れるよう

な感じで嬉しそうに話してましたよ。幼馴染か何かですか？それとも…」

ムカツく笑顔で顔を歪ませながら、楽しそうに右手の小指を立てて、村神は行つた。

「かの、」「その右手、腕から引かれやがるや」

俺は村神が言い終わる前に言つた。

「そうですか、なら良かつたです。もし君があの人の彼氏だつたら、何か対処をしなくてはいけなくなりますから…」「なんで対処する必要があるんだ。お前、その女のこと好きなのか？」

村神は困ったような笑顔を作つて、手をヒラヒラと左右に振つた。

「いえいえ、それは無いですよ。つい一週間程前に会つた人を、そつ簡単に好きにはならないでしょ？一田惚れか、運命の赤い糸か何かで小指が繋がっているのならば、話は別ですけど。ね」

と言つて、また小指を立てた。それと、本氣で小指へし折るぞ。

「じゃあ、なんでだ。……お前…まさか、ホモ、「断じて違います。変な想像しないでもらえませんか？僕だって怒りますよ？」

まつたぐーと呟いて、村神は「ホン、と咳払いをした。

「…すみません。取り乱しました…」「…いや、今の、取り乱してたのか？じゃあお前、その女のこと好きじゃないんだな？」

村神は、はい、と頷いた。

「それに、ホモでもないんだろう？」「……はい。そうですね…」と、怒りマークを額に浮かべながら右手にじぶしを作り、震わせながらニッコリ笑顔で肯定した。

「じゃあ、なんで何か対処しなきゃならないんだ？」と、二つ何の対処だ

村神は少し悩むような格好をしてから、俺の方を見た。

「教えてもかまいませんが、その代わり、一つ条件があります。いいですか？」「は？何だ、条件って。友達になれ、とか言つつもりか？」

また村神はハハハと笑つて、否定するように困つた笑顔を作つた。

「いえいえ、そんなんじやないですよ。ただ、協力してほしいんで
す。……君に」

村神が、真剣な眼差しを俺に向けた。コイツの瞳に一瞬だが、一筋
の光が走つたような気がした。

「協力？何に？」

村神は薄笑いを浮かべて、目をつぶつた。そしてもう一度目を開け
て、さつきとは比べ物にならないほどの光を灯した目で俺に言った。

「潜入捜査です」

2日目・最終的にmaking club

第2日目・最終的にmaking club

「潜入捜査？ケーサツか、お前は」「クールなツッコミありがとうございます。でも、これは別にジョークでもなんでもないです。私はケーサツです」

しばし、2人の間に沈黙が流れた。

「イヤ、だから、もういいって。ソレ、今の時代流行らないから」
手をヒラヒラと横に振る。

すると村神も、手を横に振り、「イヤ、だからジョークじゃないで
すって。ホラ、一人称も『私』に変わってるでしょ？」「イヤ、ホ
ント流行らないから、ソレ。アレだろ？お前、俺が騙されやすそう
とか思っているんだろ？甘いな。俺だってソコまで馬鹿じゃない

「いや、だから真面目にですって。キミが馬鹿だろ？が、天才だろ？が知りませんよ。ただ協力して欲しいんですよ。悪によくにはしませんから」

しばらく京介は、考え込むような顔をして、言った。

「じゃあ、証拠見せるよ。証拠」「証拠？」「ああ。俺が納得できるような証拠を見せれば、協力してやるんじともない」

すると、今度は村神が考え込むような顔をした。

しばらく目を伏せ、再び目を開ける。「分かりました。じゃあ証拠見せますから、その代わり、絶対信じてくださいね？」「いや、信じられんから証拠見せると言つてるのに、それじゃ意味ないだろ？が…」「まあ、細かいことは気にしないで行きましょう！」「…（それは言つてはダメだろう、警察として！そういう事を言つから信じられないんだ…）」

そう言いながら村上が取り出したのは、ドラマなどによく目にする

警察手帳だった。

「……」「ね？これで信じてくれたでしょう？」「……これ……偽物だよな……？」見せられた手帳を書きながら持ち、京介は村神に聞く。なぜなら、そこに記されていた文字は……

「失礼な……。本物ですよ。なんなら今から警視庁に行つてくださいともかまいませんよ？」

怖くて行けるわけないだろう、バカ！！

そこに記されていた文字は……

その日の放課後、京介と村神は学校の中庭にいた。

「…で、信じていただけましたか？授業中どころか、昼休みもずっと負のオーラが出てましたけど。大丈夫ですか？」「……ああ、なんとかな…。まあ…百歩譲つて、お前が警察のお偉いさんだということは信じよう。だが！お前が潜入捜査しているとはどうも思えん。一体どんな捜査をしてるんだ？」

「人探しです」「あ、悪い。俺、今日補習あるんだった。もう行く待ちなさい。キミの成績はトップクラスのはずですが…。というか、早とちりしないでくださいよ。人探しというのは表向きな話です」

京介は怪訝な顔をする。そして深く溜息をつくと、ベンチに腰掛け、村神にも座るよう促がした。

「では、失礼します。で、座つたといつ」とは信じてくれた、とつていいんですね?」「ああ、一応な。それで?本当は何なんだ?」

「……場所を変えませんか?」ここでは盗聴される危険があるので……妙に警察らしことを言ひ、と涼介は思った。あ、警察だったか。

……いや、こくらなんでも口ははやつすがじやないか?村神……

「で、ここまでして盗聴されたくない本当の捜査の内容って何なんだよ?」「ここまでして、といつか、どんな捜査の内容でも警察は秘密主義を貫き通します。まあ、それはさておいて、捜査の内容は、重要人物の回収と……学校周辺の調査です。キミには学校内外の危

数分後、村神と京介がいたのは警視庁の正面玄関だった。

険箇所の確認、及び学校の噂や、裏の情報などを集めて下さい。ですが、最優先項目は学校内外の危険箇所の確認です。学校の噂や裏の情報は余裕があれば、で構いません。いいですか？」

「……」「えーと…大丈夫ですか？私の言つた」と、分かりました？」京介はキヨトンとした顔をして、しばらく黙つていたが、少しして口を開いた。「…お前、ホントに警察だつたんだな」

「と、まあ、そつは言つたものの、たつた2人で行動するのは心細いですね。しかも別々の捜査をするとなると、1人で行動することが多くなるでしょう。ですから、いつその事部活でも作っちゃいましょう！」

「論理が飛躍しすぎて分からん。だいたいな、部活作るつつも人数なんてそう簡単に集まるもんじゃないぞ。サッカーとか野球とか、そういうレギュラーな部活なら活動内容とか分かりやすいから集まるかもしけんが、まさか本物の警察の捜査手伝わせられる部活なんか誰が入るか！」

すると村神はふう、と溜息をつき、笑顔で京介にこう言った。

「ならキミは入らないんですか？」

ああ、もう諦めた方が賢明だな。俺がいくら拒否しようと、最終的には自分の都合のいい様にするくせに。

京介はそう思い、苦笑いをして村神とは違う溜息をついた。

「では、木下さん。キミの仕事に部員の収集も加えます」「いや、それは全力で拒否する」

3日目・カオス（前編）

3日目・カオス（前編）

「そりいえば、この学校って同好会や部活多いですよね。そんなに簡単に作れるものなんですか？」

村神は、隣を歩いていた京介に聞いた。

「ああ……」これは同好会とか部活の規制が緩いからな。3人集まれば同好会、5人集まれば部活として成立するから……ってお前、知らなかつたのか！」「知りませんでしたが何か？」

「いや、何で開き直ってるんだよ……」「だいたい私は、最初から部活を作ろうなどとは思つていませんでした。やろうと思えば、私1人でも捜査くらいできます」

腕を組み、仁王立ちになりながら偉そうな話す村神を見て、京介は、はあ、と深い溜息をついた。

「じゃあ、何で俺に協力させようとしてるんだ。1人でも捜査できるんだろう？」「……キミが戦力になりそうだったからです。仲間は多い方がいい、とよく言つでしょう」「俺は何の知識もない、ただの凡人だけどな。そんな奴と、よく捜査しようと思ったもんだ」

「……本当は」「む？なんか言つたか」村神の発した声は、あまりにも小さく、京介の耳には届かなかつた。

「あつ、いえ。何ぢ……」「? そつか……」

だったら、何でそんな顔するんだ。

その悲しそうな顔の理由を、京介はあえて聞かないことにした。

「それで、何人くらい集めればいいんだ? 5、6人か?」

HRが終わつてすぐ、村神と京介は廃部寸前になつてゐるボランティア同好会の部室に來ていた。

「そうですねえ…。同好会は3人で成立するんでしょう?なら、まずは3人を目標にしましょう。人数は多すぎても、少なすぎても行動しづらいです。つまり、私とキミを含めて、あと1人。とりあえず、1人連れて来てください」

「ずいぶん軽いノルマだな。で?何時までに集めればいいんだ?」

村神は時計を見て、髪の毛を指に絡めた。

「じゃあ、5時にしましょう。私は私の仕事をしていますから、5時にまたここに」「わかった」

「軽いノルマ、か…。言つた俺がバカだつた…」

考えてみれば、ほとんど学校に来ていなか京介に友人などがいるはずもなく、村神と別れてからすでに30分が経過していた。

「誰か強引に連れて行くか…。というか、こういう仕事なら村神のアイツ方が得意じゃないのか？」

そう呟きながら廊下を歩いていると、反対側から1人の女子生徒が歩いてきた。その女子生徒は京介を見るなり、探していた人を見つけたかの様な顔をして、「あっ」と廊下に響きわたるような声を出した。

その声を至近距離で聞いた京介は肩を一瞬強張らせ、その女子生徒に向かつて怒鳴った。

「な、何だ、いきなり大声出しあがつて！鼓膜が破れでもしたらどうし、」「あんた、『木下京介』でしょっ！？あたし、ずっとあなたに会いたかったのよ。よくも村神長官の隣の座を奪いやがったわね！この眼帯野郎つー！」

子供のような純粋な目をして、今の京介には分けてほしいぐらいのハイテンションと早口でその女子生徒は言った。

コイツ、今何つった？俺の名前を知ってる？村神長官つて村神のことだよな？身内って……警察……だよな……？
眉間にシワを寄せながら、京介は見下すような目でその女子生徒を見つめた。

「で、お前は一体何者なんだ？ただの生徒じゃないだろ？」と、

京介が話しているにも関わらず、その女子生徒は購買で買ったであらうカツサンドを食べながら、携帯型のゲームをしていた。

「おい…。お前、親から人の話の聞き方を習わなかつたのか。といふか何だ、そのカツサンドの量は。何人分だ、それ。女の食う量じやないだろ。おい、聞いてるのか？おいつ。おい！」

「はいはい。聞いてるわよ。あたしは、」そこまで言いかけて、その女子生徒は一瞬言葉を切つた。それが後ろから振り下ろされたチョップが脳天にヒットしたからだ、ということに京介が気付くのに時間はかからなかつた。

「すみません、木下さん。私の部下が無礼を働いてしまい…。部下は指導しておきます。どうか大目にみてやって下さい。ほら、お前も謝れ。本田」

「イツ、部下とかに対してはくだけた口調で話すんだな。まあ、それが普通か。

村神に促され、本田と呼ばれた女子生徒はしぶしぶ謝った。

「…悪かったわ。でつ、でも長官つ。あたしだつてまさか、こんな所で「身内」に会うなんて思わな、「あ、そうだ。木下さん。まだ本田の紹介してませんよね?」

不自然に途切れた言葉を気にしながらも、京介は村神の問いかけに答えることにした。

「ああ、まだだ。本田つていうのか?ソイツ」「ええ、私の部下で、ホンダ本田癒月コツキといいます。地位は警視庁特殊部隊第1班班長です。どうぞ仲良くしてやつて下さい」

「よろしくね、キヨン介。じゃ、改めて、血口紹介するわつ」「いや、もういい。というか何だキヨン介つて、「あたしは本田癒月よ。会つたからには、これから一緒に行動することも多くなると思うけど、足引つ張るんじやないわよつ。いい?あたしは高校生で警視庁特殊部隊の第1班班長なのよ?あんたみたいな凡人なんか、全然戦力にもならないんだからね。勘違いしないでよ。長官があんたをパートナーに選んだのは、あんたの瞬発力がいいつて見えただけ

なんだからねつ。ホントはあたしが長官のパートナーになるはずだつたのに、あんたのせいでお台無しよつ。言つなれば、あんたはあたしの代役つてとこね。いいわねつ？ぐれぐれもあたしの代役に見合つた働きをしてちょうどだい

「ほら、本田一年上の人に向かつてなんて事をつ。まつたくお前は。いい加減、年上に敬語を使えつ。しかもつこれつき出たキャラなのに、何でセリフこんなに長いの？…？」

「そればどりでもいいが、どりするんだ？これから。お前と一緒に捜査するのか？」京介が聞くと、本田は田を輝かせ、「そうねつ、それがいいわつ。長官と一緒に仕事をできるなんて、光榮ですつ。ちゅうが、」高いソブリノの声で話すが、それを村神が遮つた。

「すみません、本田には別の仕事があるので。あ、それと申し訳無いんですが、部員は本田でよろしいですか？」「え、あ、ああ。別にかまわんが…」

本田は納得のいかないような表情をしていたが、村神の指示に従つた。

その後、本田と村神は一度警視庁に戻るため、今日の捜査はここでとつた。

* * * * *

警視庁までの帰り道、村神は本田の数歩前を歩いていた。

「…あの、長官っ」「なんだ?」「なんで嘔吐いたんですか?」村神は歩調を変えず、淡々と歩く。

「意味が分からぬ。変なこと言わぬいでくれるか」「だ、だつて…」あたしは元々長官とコンビ組んで、一緒に捜査するはずだったじゃないですか!それなのに、どうしてあんな奴とコンビ組んで、あたしには別の仕事があるなんて嘔吐いたんですか!?

「適性を判断した結果だ」

本田の言葉に何一つ興味が無いかのように、村神は歩調を変えず、振り返りすらしない。

だが「…なんで、自分にも嘔吐くんですか……」この本田の言葉で、

初めて村神は足を止めた。

村神は数秒足を止めていたが、また歩き始めた。

「だから、意味の分からないことを言うな。僕はいつだって、自分にも他人にも正直に生きてきたつもりだ。…それと、」

村神は一拍置いて、本田の方を振り返り、冷たい視線を送りながらこう言った。

「そんなことを気にするヒマがあつたら、自分が凡人に負けたことをもつと深く考えたらどうだ。このままお前に変化が無いようなら、第1班班長の座を降ろすからな。最悪の場合、SACを辞めてもらう。…いいな？」

「…はい」

村神の足音が遠ざかり、静寂が訪れる。

「…嘘、吐いてるじゃないですか」

「… そうですか、『木下京介』との接触に無事成功しましたか。そ

れはよかつた。『苦労様でした。では、引き続き一人には『木下京介』との共同捜査を命じます。一人とも、どうぞ頑張ってくださいね。期待していますよ、村神くん、本田くん』

「はいっ」「それと、第1班班長補佐から伝言を預かりました」「え…伝言ですか?」「申し訳ありません。指令に伝言を頼むなどと…とんだご無礼を…つ。後ほど厳しく指導しておきます。どうかお許しください」

「いえいえ、いいんですよ。それより、その伝言の内容なんですが、大変興味深いものでしてね…」

指令は繭をひそめ、面白そうに顔を歪めた。

「それでつ、その内容つて何なんですか?」「こら、本田つ!指令だぞ慎め!」「村神くん、あまりカリカリしていると体が持ちませんよ。では伝言の内容ですが、」

指令が口にした第1班班長補佐の伝言は、村神と本田を震撼させるものだった。

『木下京介の通っている学校に、カラスがいます。自分はそいつを追います。お二人は木下京介とカラスの接触をさせないようお願いいたします』

「…では一人に改めまして、早急にカラスの発見と木下京介の護衛を命じます。同時に一つの指令を遂行するのは難しいとは思いますが、必ず遂行してください。以上！」

「はいっ

！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9054e/>

少年のおだやかな日々

2010年10月9日07時22分発行